



Title	誰と共に生きるか？ : 生き延びるための表現
Author(s)	高嶺, 格
Citation	日本学報. 2015, 34, p. 3-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/51391
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

誰と共に生きるか？（高嶺格）

誰と共に生きるか？

——生き延びるための表現——

高 嶺 格

こんにちは。高嶺です。今日は呼んでいただいてありがとうございます。今日は秋田から来て、大阪大学のスケールに驚いています。秋田には去年から住んでいるのですが、秋田に新しく美大が出来てそこで准教授という形で働き出しました。常勤で働くということが初めてなもので、慣れない生活を送っているんですが、うちは小さい大学だし、できたばかりなので、阪大とは大きさも雰囲気もまったく違う。今日ここに来て、ああ大学ってこうだよな、と思いました。来る前から、視覚表象なんていう難しい言葉に少々面食らっていたのですが、でも来てみたらスタッフが素晴らしくいい雰囲気で、中西美穂さん〔日本学院生〕や、よしこちゃん〔中山良子：日本学院生〕らの旧友もいるので、リラックスして始めることが出来そうな気持ちであります。

1時間という短い時間ですので、早速作品を紹介していきたいと思います。最初、北原さんにお話をいただいた時から、どういう人たちに向けて話すべきか聞いていたのですが、かなりいろんな方々がいるようで、研究対象も興味の対象もバラバラらしい。

ぼくの作品もすごくバラバラなので、どの人に向けてどの作品を紹介すべきか迷っているのですが、なにから始めようかな。ぼくはいわゆる美術家です。作品をつくるということとずっと仕事にしてきて、もう25、6年。美術館やアートギャラリーで作品を発表するということと同時に舞台の演出もやっています。美術と舞台の間にぼくの中では特に境目はなくて、いわゆるマルチメディアというか、素材も何でも使うし、映像の時もあるし、パフォーマンスする時もインスタレーションする時もあるし、テキストを書く時もあります。テキストを書くのは、父親がもともと新聞記者だったこともあって、割と好きです。で、機会ごとにその時間、その場所で何が起これば一番いいか？ということを考えて、その場に合わせてプランニングしていくわけです。だから、自分でも予想だにできなかった作品になることが多々あります。ではまず最初の作品として、オーソドックスな美術館での展示、ザ・ミュージアムピースをご覧ください。わりと最近やった個展です。

（1）「高嶺格のクールジャパン」

茨城県の水戸美術館というところでやった、「高嶺格のクールジャパン」です。さきほ

誰と共に生きるか？（高嶺格）

ど「クールジャパン」という言葉が出ましたけれども、経産省のクールジャパンから見るとほとんど「裏クールジャパン」というべきふざけたタイトルです。2012年の12月から翌年2月まで開かれた展覧会なのですが、水戸というのは震災でかなり被災した場所で、福島から避難してきた方もたくさんいて、そういう場所で、震災が起こって1年半くらいのタイミングでどんなことをすればいいのか、けっこう悩みながら作った展覧会です。

作品づくりを始める時のきっかけをどうしようかと思い悩んでいたんですけども、最初に参考にしたのがこれです。「カレーの市民」。ロダンの有名な彫像なんですが、英仏戦争のときにフランス側の6人のリーダーが捕われたときの苦悩を描いた作品です。その姿が現在の日本の姿、福島の状況と重なったわけです。水戸近辺から6人、モデルになってもらって6体の彫像を制作しました。例えばこの方は、東海村の村議で、30年に渡り原発訴訟を率いている相沢一正さん。モデルになってもらった6人は、僕がこのとき出会った「怒っている人々」です。全員毛布をまとっていますが、これは震災直後にすべてを失って、毛布だけを身にまとっている女性、海外メディアでも広く流れたこの写真を参考にしました。

美術館の外観はこれ、磯崎新の建築です。展覧会場に入って最初に目にするのがこの風景【1】。ちょっと色が見にくいですが、いわゆるアニメやマンガに象徴されるクールジャパン、それを期待して来る人が相当いるだろうと、それを逆手に取って、にぎやかなイラストを冒頭に配置しました。これがディティール。知り合いのイラストレーターにイメージをすり合わせながら描いてもらいました。この光景は家電量販店をイメージしたのですが、僕は家電屋さんに入った時に、凝縮された日本を感じる時があるんですね、PR

用の音楽がえんえん鳴っているが、なぜあんな曲をずっとかけているのか、なんのために？中で働いている人は、動物園の白熊みたいな精神状態で働いているんだろうけど、あれが気にならないようになるためには、感性に相当フタをしなくてはならないはずで、感性にとっての暴力装置以外の何ものでもない。



【1】

この壁の真ん中に開く扉があって、入ると次の部屋が出てきます、ここは「敗訴の部屋」【2】。真ん中に彫像が一体立っていて、両側に掲げてあるのは、原発訴訟に関する新聞のヘッドラインです。現在までに起こった原発訴訟がどういう風に扱われてきたのかと

誰と共に生きるか？（高嶺格）

いうのをザーと並べています。

僕は知らなかったんですけど、結構門前払いとかあるんですね。つまり住民は訴える資格すら認められない。原発訴訟＝勝てない裁判と言えるほどに、原発を巡る住民の訴えはことごとく斥けられてきた。裁判に打って出るなんていうのは、住民にとって最後の手段ですよ、それを、30年、40年待たせた挙げ句に、ハイ残念でしたと。原発にとって住民はアリのようにしか扱われて来な



【2】

かったことを知り、本当に愕然とした、その衝撃をこの部屋に託しています。

この展覧会は8つ部屋に分かれているんですけど、それぞれの部屋と部屋の間にはいちいちこのビニールひもが、上からたくさん1メートルくらいの厚みで吊るしてあります。超うっとしい暖簾みたいな（笑）。その間をかきわけていかないと次の部屋に行けない。で、かきわけて次の部屋に入ると、二つ目の部屋で、これは「標語の部屋」。5・7・5で「思いやりがどうたら」やら「地球に優しく」みたいな標語が上からLEDでダァーと流れている。標語を集めようと思ってネットで検索したら、あっという間に何百何千と出てくるんですが、まあ、何の役にも立たない（笑）。でも考えたら、そういうものって街角のあらゆるコーナーに立っていて、さっきの家電屋のPR音楽と同じだけど、誰も気にしない。役に立たない訓示が大量にバラまかれて、その効果について誰も検証しない。警察とか消防のポスターもほんとひどいんですけど、あれをいつまで繰り返すんやろ、という。そういうことが続きます、この展覧会。惰性で続いているもの、責任をとらないもの。それらの中で、怒っている人が立っている。



【3】

次の「我慢の部屋」には3つの彫像があります【3】。天井に7つのスピーカーが吊ってあって、上から「ガマン

誰と共に生きるか？（高嶺格）

しなさい」という声流れている。いろんな人の声で、絶え間なく、ガマンしなさい、ガマンしなさいと、ずっと。この部屋はエコーがよくかかるので、なんというか、空から音が降ってくる感じがするんですね。「ガマンしなさい」と言われ続けながら立っている、3人の怒った像。

次の部屋です。インターネットから拾ってきたいろんな言葉が周りにバナーと貼られているんですけど、いわゆる自由な言論が可能になったかと思われるインターネットの中で、いかに無責任な言葉が氾濫しているか。

この次の部屋は映像の部屋なんだけど、シリーズで作っていた「ジャパンシンドローム」という映像作品が、3面スクリーンで3つ流れています。街なかでインタビューして、スーパーとか市場とか水族館なんかで放射能の影響をなんとなく聞くんですね。「この食べ物はどこ産ですか?」「大丈夫ですか?」、などと。で、お店の人がどう反応したかというのを、舞台上で再び再現したものを映像化しています。最初に作ったのは京都で、2011年9月、そのあと2つ目を山口で、3つ目を水戸で作りました。全部で50編くらいの短いクリップが、3つのスクリーンに分かれてあります。のちほどひとつだけご紹介します。

この部屋を抜けると、「ニュークリア・ファミリールーム」、つまり「核家族の部屋」【4】。1945年に世界で最初の核実験をアメリカが行った、それから現在までのすべての核実験の歴史がここに羅列してあります。その数、2千以上。驚くべき量です。そのデータが、

50mの廊下の両壁に掲げてあります。その上に所々かかっているのは高嶺家のスナップ写真です。一番最初にあったのが母親の小さい頃、そして父親の幼少期。そこから現在まで、核実験の年代に合わせて、家族の写真掲げてあります。これを見てわかるのは、例えば僕が誕生した1968年、この頃にはほぼ毎日くら



【4】

いのペースで、世界のどこかで核実験が行われていたということ。核実験の歴史と自分の歴史、別々の60年という時間を、同じタイムラインに重ねてみることで、自分の記憶が変容する。そういうことをやってみたかったのです。この部屋の廊下の床に落ちていたのは毛布をかたどった粘土で、これはさきほどの彫像たちが着ていた毛布です。脱ぎ捨てられた毛布は廊下にテンテンと落ちていて、それが最後の部屋につながります。

これが最後の部屋「トランジットの部屋」です。柵で仕切られた中に、さらに彼らが脱ぎ捨てていったものたちが散らばっていて、シャツとか靴とかベルト、それらをムービン

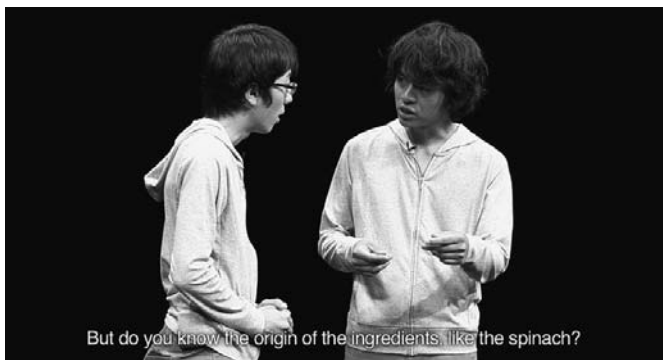
誰と共に生きるか？（高嶺格）

グライต์がゆっくりと照らしています。観客はそれらを、周りの柵の上から見下ろしている。で、彼らは服を脱いでどこに行ったのか？についての答えはありません。ぼく自身もその答えを保留しようと思って、この最後の部屋は宙ぶらりんなままにしました。この部屋ではほかに音楽も流れていて、日本の小学生が歌った超下手くその英語の歌、レット・イット・ビーとかウィ・アー・ザ・ワールドとか。相当ひどいんだけど。これは、ぼくが深夜の河原で棒で振り回している映像で、上から吊されているモニターに映っている。というわけで、クールジャパン、もうちょっと詳しくお話したいところなのですが、時間がないので、この後のディスカッションで聞いていただくということで。

（2）ジャパンシンドローム

次は「ジャパンシンドローム」という映像のシリーズから一編。魚屋さんのシーンです。まずは見て下さい【5】。

さきほど申し上げた通り、これは関西編・山口編・水戸編合わせて全部で50数編あるのですが、これと逆の印象を受けるようなシーンもあるんです。生産者の苦悩をちゃんと説明する人とか。でもこれよりもっとひどいもの、ひどいというか、怒り出す人もいたりして、これは中間くらいの反応という感じですかねえ。で、日本の3つの場所で3つのバージョンを作ったのですが、去年1年間ベルリンに行くことがあって、ベルリンで同じフォーマットの作品を作ろうと思っていたんですね。



【5】

お店に出かけて店員の反応を映像にするという。で、ベルリンで準備を進めていたのですが、7月に日本で衆議院選がありましたよね、その結果を見て、作るのを止めたんですよね。このシリーズを作ったのは、原発に対して意見を保留しているグレーゾーンな人たちが結構な数がまだいると思っていた頃で、意義があると思ってやっていたんですけど、衆議院選の結果を見て、グレーゾーンの人が急激に減ったのじゃないかと思った。もっと直接的なこと、強引な手法を使わないと、この手法では曖昧すぎるのではないかという気がしてきてですね。で、その代わりに、レイブパーティみたいなことをやったんです。京都市役所前の広場で1時間だけやったイベントです。映像を見てください。

誰と共に生きるか？（高嶺格）

市役所の建物にパブリックプロジェクションしていて、その前でやっているライブのパフォーマンス映像をそのまま出しています【6】。で、これはUストリームでライブ中継しているのですが、上の方に出ている文字が観客への質問で、その質問に対して、ツイッターで答えを送れるんですね。で、送られた答えが下に出る。ぼく若い時はクラブで結構踊り狂ってたんだけど、最近ずっと踊ってなかったけど久しぶりにやってみようと思って。



【6】

相当気持ち悪いことになってますけど(笑)。で、どうなるかなと思ってたんだけど、1000人くらい人がきて、10分くらいでみんなワーと踊りだしてめちゃくちゃ盛り上がった。最後の方にちょっとメッセージが出てくるんです。それまでのパーティがまるで前振りだったかのごとく、最後にメッセージが出てきて終わる。

ドイツが原発をやめる決定をしたというのを聞いて、でもドイツの人に聞くと、いやあ一応決まったけどどうなるのか分からんのよね、とみな言う。それを聞いて、これはほんとにも無くなるというようなことではないんだな、と思った。なのであえて「ドイツよ、ありがとう」と言い続ける。ドイツの人にこれを見せたら、恥ずかしいから止めてくれっていう顔をするけど。以上、ジャパンスンドロームシリーズでした。

次は韓国シリーズです。まず、コリアン・スタディーズ。ソウルの韓国書道協会会長さんという偉い人のところに書を習いに行って教えてもらった。2週間だけなんですけど。赤入れしてもらったものをそのまま作品にしている。なぜこういうことをしたかといいますと、森美術館、ご存じですかね、六本木にある日本で一番イケイケの美術館、そこで出品の話があって、みんなイケイケでくるんだらうなー、イヤだなーと思って、その中で一番地味な作品にしようと思って、書道がいいかなと(笑)。で、習いに行って、この通りペロンとガラスケースの中に入れて、なんか韓国人の書道がひとつあったな、くらいのやつにしよう、と。もうひとつは焼き物。焼き物の技術ってのは、中国から韓国に渡って日本に入ってきたということがあって、これも一緒に作りました。

誰と共に生きるか？（高嶺格）

時間の流れでいうと、このコリアン・スタディーズは二番目で、今からお話するマンガン記念館というところでやった「在日の恋人」というプロジェクトが一番最初です。マンガン記念館というのは、マンガンという鉱物を掘っていた跡地です。朝鮮半島から連行されてきた労働者たちで採掘が行われていた、その労働の歴史を残そうと人権博物館としてオープンしている、そんな場所です。そこに住み込ませてもらって展覧会を開いたことがあります。2003年です。京都ビエンナーレという展覧会があって、ビエンナーレなのに一回で終わっちゃったんですけど、その出品作としてやったプロジェクトです。

その時のディレクターがですね、吉岡洋さんという京大の先生なんですけど、吉岡さんがビエンナーレの全体のタイトルを「スローネス」にすると行って、ぼくはそれがずっとひっかかっていたんです。スローネスというのは、日本、金持ちの国がスローネスなんていうのは、なんか腑に落ちんなあ、という。吉岡さんに話をしに行ったら、最終的に吉岡さんの口から、それは今やっていることを全てやめるというぐらいの意味として考えてほしいと。それなら分かる、今やっていることを全てやめる、それにつながる生活をしてみたいなと思って。洞窟で暮らす、というのが最初のプランだった。で、1ヶ月なり2ヶ月なり、洞窟で暮らしてみたいと。ただ洞窟というのはだいたい公が所有しているので、住むなんてことがどうしたら実現できるかわからなかった。

で、友人に教えてもらってマンガン記念館に行ってみたら、そこは私有地で、家族経営なんです。京都の奥の奥だからアクセスも悪くて、まあ儲かるような場所じゃない。自然の洞窟じゃなくて人が掘ったトンネルだけれど、実はその方が断然面白いことになりそうだと思った。ぜひここを使わせてください、と何度かお願いに行っているうちに、館長さんは、何がやりたいかよう分からんけど、まあやってみなさい、みたいな感じになったんです。しかし、ここにおいて分かったのは、そういう人権博物館、特に在日韓国人が運営する在日の人権に関することというのは、相当タフじゃないとできないということです。日本の右翼は強いし、当然格好の攻撃対象になる。ちなみにこの人が館長なんですけど（笑）【7】。これくらいの人じゃないと出来ないですよ、ほんとに。このくらいの強面でないと無理。まあ、僕もビビりながら全身でぶつかっていった感じです。



【7】

ただ、まず住むところがなかった。この辺りは賃貸もないし、森の中にテントでも張って数ヶ月暮らすかな、と思っていたら、館長さんが、半分作りかけてほったらかしにしていた木の構造があるから、これを作りなおしてちゃんと家にしたらいいいやんか、わしも一

誰と共に生きるか？（高嶺格）

緒にやるさかいに、と言って。どうやって作るのかと思っていたら、まず裏山に入って行って、チェーンソーで木を刈って、それをバサーと落として、ユンボで引っ張ってきて、その皮むきをするところからスタート（笑）。あ、こういうことなんやと思って、これをしばらくの間、館長が棟梁になって一緒に作って、お風呂もこうやって灯油で沸かせるのを作って（笑）。マムシとかもいっぱい出る。水がないので、横に流れている小川の水を上流から引いてきて、これがすべての私たちのライフライン。

インスタレーションに使ったのがこの穴で、約80メートルあります【8】。最初50mはまっすぐなんですけど、途中で曲がるんです。曲がるとほんと真っ暗けの真っ暗けで、目をつぶった方が明るく感じるくらい。最初入った時は、ほんと怖かった。なんか出てきそうで。洞窟に住むなんて言っただけのもの、作品なんてできるんだろうか、これから数ヶ月後に自分はどうなってるんだろうと、



【8】

そういう感覚ですとおったんです。館長さんは、アートなんか全く縁のない人なんですけど、ぼくらがやっていることは面白がって、毎晩酒を持って現れて、一体芸術ってなんやねん、みたいなことをえんえん喋っていた。なんか、毎晩そんな話をしながらですね。すごくいい関係を結んで、展覧会がオープンしてからもお客さんがたくさん来てくれて、非常に幸せな瞬間でした。

これが最終的に洞窟の中に展示した作品です。現地で素焼きしたオブジェを、蔓を土台にして展示しています。この写真は光を入れて撮ってますけど、実際は、お客さんに入り口でLEDのライトを渡すんですけど、それがホワーンと付いてホワーンと消えていくという特別に作ってもらったライトで、かなりのお客さんが怖がって奥まで行けなかった。でも、自分が最初に入った時の恐怖を感じて欲しかったので、わざとそういう風にしたんです。

この作品は何かといいますと、自分の恋人に対するパフォーマンスだったんですよ、半分は。自分が、その時期に付き合っていて、今、嫁さんになった人、その嫁さんが在日韓国人の2世で、ぼくは在日とかに対しての嫌悪感とかね、差別意識とか全く持っていないと思っていたんだけど、どっかで彼女がぼくの中にそういうものを感じていたらしく。「あなたのその在日に対する嫌悪感なんやの」、ということを言われたことがあって、それをずっとずっと自分で自問して、その正体を突き止めたいと思っていた。ここで住んで暮らすという経験の中に何かヒントになることがあるんじゃないか、というそういう超プライベートな理由で、この作品を作った。作品を作ったというか、作品を作ることを

誰と共に生きるか？（高嶺格）

言い訳、ネタとして、この館長の元で暮らしてみたくて。お客さんには言っていないけど、それがぼくの個人的な動機です。このマンガン記念館という場所を知ってほしかったというのと、マンガン記念館の持っている背景、あるいは雰囲気とかを含めて、そこを利用して、個人的に展覧会を開くということをやった【9】。在日シリーズとしてはこのマンガン記念館のが1つ目で、さっきの書道と陶器のやつが2つ目、その後、今日は時間がないので紹介できませんが、結婚式を題材にした「ベイビー・インサドン」という作品があります。



【9】

（3）「木村さん」（仮）

「木村さん」を最後に紹介しようと思っていたのですが、ちょっと時間が、（あと、10分ありますよ、との声）。

10分あるの。じゃあもう一つだけ作品を紹介します。身体障害者を扱ったもので「木村さん」という作品です。在日シリーズよりさらに古くて、1998年です。この木村さんという方は、2年前に亡くなりましたけれど、森永ヒ素ミルクの被害者で一級障害者、2歳の時に重度の障害を負ってしまった人なんです。ぼくが90年代に京都に住んでいた時に、彼の介護を5年間やっていて、月に1回か2回くらいのペースなんですけど、彼の自宅に出向いて介護していました。最初に行った時に、ぼくは彼ほど重たい障害者の人と会ったことがなかったので、どう接していいのか全く分からなかった。口も聞けないし、あー、とか、うー、とか、ほとんど一人では何も出来ないような体の人だった。

しかし付き合っているうちに、だんだん通いが出てきて、ぼくのことも信頼してくれたし、面白がってくれた、みたいところがあって。一年くらいたったある日、ぼくに打ち明けてくれた、というか、何か、あー、ってずっと言ってるから、「何ですか木村さん」、ってその時、全然分からなくて。ずっと聞いていたら、どうやら押入の中を指しているの、中を開けてみたら、大人のおもちゃがドバっと入っている箱が出てきた。で、あ！と思って、その時、障害者の性、っていうか、木村さん、性欲がそりゃあるよな、という。それまで、たぶん自分が考えないようにしてきた、そのことを彼の方からこじ開けられたという感じで、なんか頭の中の皮がペロっとめくれたような感じがしたんです。動揺したけれど、同時にすごいうれしかった。僕と木村さんとの関係が次のステージに入ったんだと。その瞬間から彼の性の介護をやるようになって。っていうことを題材にした作品なんです

誰と共に生きるか？（高嶺格）

けど。もともとそういう、性の解放というかね、マスターベーションを映像にして、それを公開しようと思っていたわけではないんです。

というのは、彼はパフォーマンスもやるし、バンドもやっていたんですが、その演奏というのがどうしようもない。5人くらいのバンドで、すごいきれいな音楽をやっているんだけど、木村さんは車椅子にくっついたキーボードを演奏していて、「介護」という音がいろんなキーで出てくる。バンバン押しまくるもんだから、「介護、介護、介護」って、音楽は全部ぶちこわし。僕はライブに行く度に「木村さん、ほんといい加減やめてください」（笑）。ある日、キーボードやめてマイクで声を使ったらどうか、って提案したら、おー、と言うから、マイクを買いに行って、一緒に家で遊んでいたんですよ。そしたらいい感じで、でも途中で彼がいびきをかいて寝てしまって、木村さん何寝てるねん、と言って、乳首をさわって起こそうとするけど全然起きない。で、股間を触ってみたら大きくなっている、あ、木村さん！という感じで、そのままいつものようにいかしてあげた。その間、たまたまずっとビデオを回していたんだけど、それを家に帰って見てみたら、すごい幸せなビデオが撮れていた。でも、ホームビデオとして見せられるものじゃなかったから、なかなか見せる機会がなくて、3年後に、そのビデオを使ったパフォーマンスとして発表したんです。というのが、この木村さんという作品。偶然撮れたビデオがあって、自分ではとてもいいビデオだと思っているが、ビデオとしては発表が難しい、だからそれを見せるという目的で、ライブパフォーマンスという形に変えて、自分のアクションと共にやった。そのパフォーマンスをもう一度編集して、映像作品にまた変換している、というちょっとややこしいもんなんですけど、ご覧いただきます【10】。10分弱あります。性器が写りますんでご了解ください。



【10】

（たかみね ただす 秋田公立美術大学准教授）

■高嶺格先生

現代美術家、演出家。1968年鹿児島生まれ、京都市立芸大漆工科・岐阜イアマス卒。秋田公立美術大学准教授。主な個展に、2003年「在日の恋人」、2010年「スーパーキャパシターズ」、2011年「とっておくてよくみえない」、2012年「高嶺格のクールジャパン」など。2003年ヴェネツィア・ビエンナーレへの参加をはじめ、釜山ビエンナーレ、横浜トリエンナーレ、あいちトリエンナーレなどに多数出品。著書に『在日の恋人』（河出書房新社、2008）。